

曾野綾子

幸福という名の不幸

幸福という名の不幸

曾野綾子



講談社

幸福という名の不幸

昭和四十七年五月二十四日 第一刷発行

昭和五十四年五月十四日 第五十刷発行

著者 曾野綾子

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二―二―二／郵便番号一―二

電話東京(〇三)九四五―一一一(大代表)／振替東京八一三九三〇

印刷所 東洋印刷株式会社

製本所 株式会社大進堂

定価 九八〇円



©曾野綾子 昭和四十七年／落丁本、乱丁本はお取替えします。

目次

第一章	虹の中の家族	9
第二章	お茶の時間	17
第三章	桜田門内の変	25
第四章	嗅覚と疲労	33
第五章	人間の顔の像	41
第六章	緑灰色の馬	49
第七章	年去り年は還れども	57
第八章	新鮮鶏卵	65
第九章	兎小屋の中の資本論	73
第十章	天罰と忠実	81
第十一章	今日は、赤ちゃん	89
第十二章	無関心の殺意	97
第十三章	茶碗酒	105

第十四章	町で……	113
第十五章	お汁粉と首飾り	121
第十六章	死者の試し	129
第十七章	この世の処遇	136
第十八章	生と性	144
第十九章	花を摘みながら	152
第二十章	もう一つの試験	159
第二十一章	冬の日	167
第二十二章	マキ子の縁談	176
第二十三章	春の音	184
第二十四章	風のまなざし	192
第二十五章	印度風のお茶	200
第二十六章	不用の金品	208

第二十七章	微笑のお化け	215
第二十八章	トキの詩	223
第二十九章	「嵐」	231
第三十章	カナリー椰子の花	239
第三十一章	西洋の神さま	246
第三十二章	紅ヒバ号飛ぶ	254
第三十三章	燕の巢	261
第三十四章	白手袋の別れ	269
第三十五章	最後の日曜日	276
第三十六章	星の視線	284
第三十七章	凱歌	292
第三十八章	夜の乗客たち	300
第三十九章	人形の人形	307

第四十章 宝貝 315

第四十一章 上司の妻 322

第四十二章 旅に出た人 330

第四十三章 屋根の上の月 338

第四十四章 横顔 346

第四十五章 遠い笑顔 353

第四十六章 この世の時 361

第四十七章 石の顔 368

第四十八章 不運な家系 376

第四十九章 霧 384

装
幀
原
弘

幸福という名の不幸

曾野綾子

第一章 虹の中の家族

1

榎並黎子は、父母の慈愛を春の曙のように受けて生まれた娘だった。他人がそう言うのではない。黎子自身がそう思うのである。初めて父の愛を確認したのは、今から十一年前、父が死んだ十七歳の年だった。

葬式とそれに続く一連の宗教上の儀式が終わった後、或る日、黎子は父が戦前にイギリスで買い、そのまま愛用していたマホガニイの揺り椅子に坐っていた。昔から、父はこの椅子に坐り、膝の上にすっぽりと黎子を乗せてくれた。父の膝はそこだけ、一切の暗く悲しく不安なものを受けていない場所だった。黎子は父の胸骨の上にお河童の頭を載せていた。温くて、どっしりとして、巨人に護られているようだった。しかし今、そのように黎子を包んでくれるものはない。マホガニイの椅子は、堅く、父の骨でできた椅子のように感じられた。黎子はその椅子に顔を伏せた。椅子には生前の父の愛用していた葉巻の匂いが、父の体臭の

ようにしみこんでいた。その香に頬をすり寄せながら、突如として黎子は号泣した。

その時初めて、黎子は、もはや誰も自分を守ってくれないのを感じた。母には怒濤のように押し寄せる外界の冷い苦い空気をはねかえす力はない。

黎子は初めて、父の偉大さを感じた。それと共に、狭心症で斃れた父は、身をもって今まで冷酷な社会から家族を庇い続けて来たのだと思った。

父は何を残してくれたのだろう。

黎子は今でも時々考えることがある。

父は黎子の考える最も好ましい男性の一人であった。何よりも父は黎子に、この世は信じるに価するものであることを教えてくれた。誠実で、寛大で、忍耐強く、ユーモラスで、そのような徳がありさえすれば、この世で最低限、暖い家庭を作ることができ、その中で家族は心ゆくばかり甘えあい、許し合っている、という、普遍的な幸福の典型を実際に作ってみせてくれたのだ。それは娘にとって何よりも大きな贈りものだ。

黎子はその時、一つの光景を思い出していたのだ。それは黎子の父が、商社会社のニューヨーク支店次長として、三年間勤務していた時のことだ。母の小夜子と姉の暁子と黎子の三人は、父より数ヵ月遅れて父の任地に着いた。黎

子は十四歳、姉は十八歳の時である。一家はニューヨーク郊外に——そこはニュージャージー州だった——典型的な木造家屋の一軒家を借りて住むことになった。二階には寝室が三つあり、階下には寒い外から帰ってくるといつもほっとする温さに満ちた台所が、窓の外に檜の大木の見える食堂と居間に連っていた。その檜の木の下で春になるとリスが遊んでいるのを、何とかして驚かすまい、と家族は息をひそめて窓から覗いた。

家のすぐ近くには、大きな池があり、その周囲は、まだらかな岡と森に綴られていた。或る日曜日、一家は池の畔にピクニックに行き、帰りがけに突然、息をのむほどの壮麗な虹が、池の対岸に立ち上ったのを見た。すると一家は自然にその虹の方へ手をつないで歩み出していた。父と黎子と晧子と母、というふうに、横に一列に並んで……。その時、黎子は、ああ、今、私たち一家はしあわせなのだ、と叫びたい思いだった。

今、黎子の眼には、十四歳の自分を含む一家四人が、燦然たる七色の光の半円に祝福されながら、岡の頂きへと登って行った姿がありありと見える。虹は神が平凡な庶民たちの慎しいしあわせを希う心に対する無言の勲章として、作られたものなのではないだろうか。なぜなら、虹は、それを微笑んで見上げる総ての人々を抱擁する。虹は誰をも

差別せず、誰をも拒否しない。

若い黎子にとって、その頃、不幸とは一つの瑞々しい觀念に過ぎなかった。現実にはほほ楽しいことだらけだった！黎子は「不幸な話」をきく度に——それが物語であれ、実話であれ——涙したが、それは不幸すらも現実の幸福の味を引きだるために存在している一種の香料の役目を果しているように思えたからだ。黎子は現地の学校へ入り、間もなく英語もどうにか不自由しないようになったし、ソバカスだらけの一つ年下のお茶目な男の子に、やや喜劇的で童話的な求愛を受けた。姉の晧子も、やはりボストンへ留学中だった副島藤太という学生と知り合い、これは大人の感情で熱烈に恋われる身になった。若い姉の方は、終始受け身だったが、黎子は自分も数年経ったら、そうなるに違いない運命を姉の場合に見ているようで、自分も胸を轟かせ続けた。副島藤太の父は、ビール会社の常務で、黎子の父も満更知らない訳ではなかった。二人の交際の間もなく藤太の親たちも認めるところとなり、そのような周囲の公認が、藤太の心にも自信と余裕を取り戻させたようだった。十四歳の黎子の眼に映った藤太は、浅黒い顔をした、礼儀正しい青年で、彼は晧子に外套を着せかけることから、ドアを開けてやることまで、完全にアメリカ式で、しかもそれらの振舞いは水中の魚のように自然だった。

藤太を好きな癖に、姉は、いざとなると、日本へ帰った大学へ行きたい、と駄々をこねたが、二十一歳で藤太の妻になることが決定しているのに、それは無駄ではないか、と説得されると、比較的簡単に進学の意志は捨ててしまった。若い二人は、藤太の友人や黎子をお伴に、フロリダの夏や、ケープ・コッドの暗い冬を見に行き、榎並一家の帰国が近づく頃には、有名なニューヨークの五番街のティファニー（宝石や銀器などの世界的有名店）で、新家庭でどうしてもほしいと思われる食器類を買い整えたりした。

「黎子ちゃんが大学へ行きゃ、いいわよ」

姉は自分を慰めるようにそう言い、黎子も、文学が好きだったので、高校を出たら、自分は大学へ行ってアメリカ文学を専攻しようと考えていた。ニューヨークは暗い煤けた町で、黒人たちの住む煉瓦だてのアパートは、殺風景な倉庫のようだった。もっと悲惨な黒人専用の住宅地域があるとは聞かされたが、実際にはついぞ連れて行って貰ったことがなかった。副島藤太も、そんなところへだけは行ってはいけないと脅すように言い、暁子も、藤太の口車に乗って、「そんなところへ行ったら殺されちゃうから」と、好奇心の旺盛な黎子を牽制した。それで、そこでも、彼女の不幸は、黎子の中で、又もや清らかな童話に結晶した。黎子は優しい心根で、リチャード・ライトの小説や、ラン

グストン・ヒューズのブルースなど、いわゆる黒人作家の作品を読み、マヘリア・ジャクソンの黒人霊歌のレコードに聞き惚れた。黎子がアメリカの社会に、それほど易々と溶け込めたのは、一つには、母の小夜子が津田英学塾の卒業生で語学も達者だし、父と共に戦前の外国生活の経験もあったからであった。

榎並一家が、東京へ帰った翌年の秋に姉は結婚することになった。藤太はD銀行に就職している。副島の家では何も仕度らしいことはない、と言ったが、それでも、その口の下から、副島夫人は、暁子を持って来たら「便利」なささまざまな品物を列挙した。その中には、畳を減らさなための「薄べり」のような安いものから、ミンクのストールまで、不思議な取り合わせの品々があった。

「ねえ、パパ、副島さんのところはトクするわね」

或る夕方、黎子は揺り椅子の父の傍にうずくまりながら言った。

「そうだな。暁子のようないい娘を貰えてトクだろうな」

「そうじゃないのよ。いろいろなお道具つけて貰えてトクだと思うの」

「どっちがトクということはないさ。親たちは子供たちのしあわせのために用意するんだから」

「ねえ、パパ、うちにはそんなにいろんなものを買うお金

あるの？」

黎子は昔のように甘えて、父の膝の上にそつと腰を下ろした。黎子はアメリカに在るうちにすっかり背が伸びて、爪先が床に着きそうになっていたが、下へ足をつけることは父への裏切りのように思えて、わざと、前の方へ脚を伸して父の胸に寄りかかった。

「お金はないさ。工面してゐるんだ。実は骨董といえるほどでもないけれど、青磁の香炉や、木彫類を少し処分した。

後は会社で少しお金を借りて、何とかなるだろう」

「香炉なんか売っちゃって、パパ悲しくない？ あれ、お祖父ちゃんのお形見でしょう？」

「悲しくなんかないさ。生きてゐる人が一番大切なんだ。娘に肩身の狭い思いをさせたくないからね」

その時、黎子は、私は決して仕度を要求されるようなうちへは嫁かない、と思つたのだが、それは一つの原型になつて、ずっと彼女の心に定着したのだった。そして黎子が父の顎の下に顔を固定させようとすると、生まれて初めて、父は躊躇らいながら、黎子の頭を軽く押しつけるようにした。

「ちよつとどいてくれ、息が苦しいよ」

しかし黎子が立ち上がると、父は間が悪そうに笑ひ、「黎子も重くなつたなあ。赤ん坊の時と同じだと思つてい

ると、パパは潰れそудだよ」と笑つた。

夏休みに入る二日ほど前、学校に電話があつて、父が心臓の発作のため会社で倒れて入院した、と黎子は暁子から知らされた。そして、彼女が病院に着いた時、父は既に死んでいた。

2

父の死後、いつからだろう、黎子にとって世界に罅が入つたように感じられたのは。そんな大きな年になる迄、それに気がつかなかつたとは、何という甘いことだろう、という非難を受けそうなことも知つてゐる。第一、父の死そのものも、他の家庭の父の死と比べれば、決して悲惨とは言えない。父は長く苦しまなかつた。父は自分が死にそうだとも思わなかつたろう。父は会社で倒れた。殉職のように見える。お葬式の手筈も何もかも、会社の人がやつてくれた。それは賑やかな葬式であつた。

赤むけの心臓をもつた黎子は、割れ目から凍えるような風の音を聞いた。魔物たちが囁き交し、空気はその成分の密度をちよつとばかり変えたので息苦しくなつたような気がする。

もう子供ではないのだから、と黎子は自分にも言い聞か

せた。私はシェークスピアを少し読んだ。あそこに書いてある悲劇は、すべて「日常的」なことなのだ。これから、私はそれを、一つずつ味って行くだけだ。

さし当り、姉の結婚の仕度を予定通り進められるかどうか問題だったが、勝気な母は、副島家に、「主人が望んでいたことでございますから」と百カ日を過ぎた後のことに、影響させる気は少しもないことを伝えた。

「お金あるの？ ママ」

或る日、黎子は姉のいないところで、こっそり母に尋ねた。

「そうね。お父さまの退職金として頂くもので何とかなるから」

「だけど使ってしまったらいけないお金なんでしょう」

「だけど、ママもそのうち働くから構わないわよ」

「私も働くわ」

黎子は何気なく言った。

「ママが働くなら、私も働くわよ」

黎子は母の顔を見つめた。

「そうね。二人で働きましょうか」

黎子は深く頷いた。その母の一言で、黎子の運命は決つたのだ。黎子はその言葉を思い出す度に、胸が締めつけられるような気がする。母を怨んでいるのでも責めているの

でもない。只、本当に、何と母も自分も軽々と人生の方針を決めたのだらうと思う。

ふつうの母ならそんな時、「いいえ、黎子だけは大学へやらせなきゃ」とムリするのではないかと思う。或いは、「あなたにそんな犠牲を払わせてごめんなさい」と暗い顔をするのではないか、と思う。けれど、母の母は牧師の娘だった。その祖母の影響をうけて、母は人生に対して限りなく自然なのだ。豊かな時には豊かなように、貧しい時には貧しいように、胸を張って生きて行く性格である。

父を失うことの新たな悲しみの側面を黎子は味った。それは「屈辱」とでも呼ぶべきものだったかも知れない。副島家が、言葉の端々に、藤太と晧子の縁組を今はそれほど望んでいないということを示す瞬間があったのだ。

「藤太は、御両親揃っていらっしゃる御家庭から、お嫁さんを買いたいと言っておりましたのよ」

という副島夫人の科白は、決して、父の死を悼んでいるとは思えない。母はそれに気づいているのかいないのか。少くとも母の考えの論理にはそのようなことはあり得ないから、母はそれを亡き人への弔いの言葉と受けとっただろうと思う。

しかし幸いにも、二人の結婚は壊れることはなかった。式の日には、副島家の人々も笑みこぼれていた。披露宴の

席に飾られた父の遺影は、納得しているように見えた。

母が知人に頼んで通訳の仕事を貰うようになったのは、その年が明けて早々である。姉の結婚のために使った費用は思いのほか多額になり、残りのお金の利子だけで、母子二人が食べて行くことなど思いもよらなかった。

初めての仕事は、知人の更に知人が、アメリカから仕事上の客を家庭に招ぶというので、その通訳のためであった。母は古い絹のスーツに、嫁入った娘からその目だけ借りて来た真珠のブローチをつけた。

「しっかりね」

冬の夕方は早く暮れる。母を送り出すと、家の中に黎子は一人になった。口笛を吹きながら雨戸を閉め、台所に入ってラジオをつけながらオムレツを焼いた。さし当り、母を心配させないためにも生活をきちんとやっていかねばならない、と思った。姉にはまだ話してないけれど、姉の部屋をそのうちに学生にでも貸そうかという話も出ていた。

未来に対する不安が、海のようにあたりをとり巻いていた。怒濤の音が心臓の鼓動の音になって黎子の心理になだれ込んでいる。世界中の人が自分達母子の存在を忘れていくような気がする。オムレツでひとり夕食を食べ終ると、黎子は父の揺り椅子のところへ来た。母が、冬になると、去年と同じように父の椅子に愛用の格子のウールの膝掛け

をかけた。クリーニングに出してしまっているから、そこには父の体臭は残っていない。しかし黎子はその中にすっぽりと体を包み込んだ。

《ねえ、パパ》

と彼女は小声で呟いた。

《私に仕事を見つけて下さいな。黎子、行き場がなくて困ってるんです》

父の死んだのは七月の下旬である。ほんの一、二カ月の差で、目ぼしい就職の口は皆決ってしまったのだ。けれど父にそんなことを言ったら悪いと思って、黎子は遠廻しに言ったのだった。

《パパ、お願い、何とかして。いい仕事を下さい。お給料は高くなくても構いません。きちんと張り合いをもてる仕事ならいいの。黎子、何でもやります。お茶汲みだって何だってやります。だから仕事を下さい。お願いします》

黎子は椅子の中にいる父の霊に向かって呼びかけた。

突然、電話のベルが鳴った。黎子は走って行って受話器を取り上げた。

「曉子よ」

姉であった。

「実はね、黎子ちゃんの就職の口あったの」

黎子ははっと後をふり返った。揺り椅子に父がいて、に